

慶福万来

近藤玲君、佐武百合さん おめでとう

平成4年卒 吉川浩一



去年の12月7日に私の同期(H4卒)の近藤玲君と後輩の佐武百合さんの結婚式があり、私も披露宴に招かれた。会場のホテルに到着し、時間になって会場へ入り自分の席についてみると、何と主賓席だったのには驚いた。何せそこには窪田元監督や三浦氏始め新郎新婦の恩師恩人ばかりであったので、その居心地たるや手に汗握るものがあった。まあ確かに新郎新婦には色々と面倒を見てきたつもりではあったが、感謝されすぎであった。まさか自分を他の航空部のOBから隔離したのではと一瞬勘繰ってしまったが、横の席には同期の青木もまた緊張して座っていた。それから披露宴が始まったのだが、お祝いの言葉がこれまた長かった。よくもこれだけ話の長い人を選んだものだと思うくらい、出る人出る人話が長かった。今となってはどんな話だったのか全く覚えていないが、たぶん新郎新婦を褒め称えていたのだと思う。し

かし、私にはそのお祝いの言葉と新郎新婦の顔がどうしても一致せず、誰のことを話しているのかなあと考えたりしていた。ただ1人司会者の顔だけが次第に引きつっていったのが印象的だった。そうこうする内に宴は進み、花嫁のお色直しとなり私は花婿に祝いのビールを注ぎに行こうとしたが花婿は花嫁と席を立ったままなかなか帰ってこなかった。一体どうしたのかと訝しく思っているところに新郎新婦の再入場となった。この時私は会場全体の心が1つになったのを肌で感じた。何故かと言うと、花嫁の姿が前と同じように見えたからだ。しかし、2つの同じ絵でまちがい探しをするように丹念に見直すと(私はメガネをかけた)レースの帽子をかぶっているのが目についた。同じ姿ではなかったのだが、これは我々の注目を促す敵の作戦(なかなかやるもんだ!)だと気づいた私は、術中に陥らないように気をひきしめ直した。しかし、花嫁がお色直しの間何をしていたのかの謎は残った。そして私は頼まれていた余興をすることになったのだが、何と依頼を受けたのが式の2週間前だったのだ。普通に考えれば突然すぎるのだが何せ一杯飲んで帰った直後だったので2つ返事でOKしてしまった。困った私は名古屋にいる後輩3人に集合をかけ急遽作戦会議(飲み会)を開いたのだ。そんなこんなで披露宴も無事終わったのだが、友人一同を代表し、2人の新しい門出に心から祝福を送りたいと思う。またこの場を借りて司会の玉井君や遠路2人の為に集まって下さった方々に心からお礼を申し上げます。

松岡、おまえは、めっちゃめっちゃイケてる!!

昭和62年卒 広田佳史



「松岡は最近めっちゃめっちゃイケてる」という未確認情報をGETした翔友会特命取材チームは極秘裏に調査を行い、ついに平成9年3月9日、大阪は万博記念公園にあるホテルサンパレスにおいて驚くべき事態を目撃したのであった。そこで以下にこの事態についての我々の分析結果を報告する。なお、以下の記述はすべて事実である。

〔松岡めっちゃイケ分析その1—松岡は年をとらない!〕

松岡の学生時代を知っている人に「彼はどんな人?」と聞けば、ほとんどの人が「オヤジ」という答えを返してくるであろう。しかし今や彼は「オヤジ」ではない。なぜか?彼は33歳になった今も学生時代と同じ、いや学生時代よりも若くなっているのである。今彼は「オヤジ」ではなく「長塚京三似のシブい男」に変身してしまっているのである。

〔松岡めっちゃイケ分析その2—松岡の嫁さんはめっちゃカワイイ!〕

またしても学生時代の松岡を知っている人に「松岡の女性関係は?」と聞けば、ほとんどの人が「?」という状態になるだろう。事実彼は学生時代、先輩後輩を問わず男には強かったが女の子にはからきし弱かったのである。しかし今や彼はそんな学生時代におさらばするように芸能人風のめっちゃカワイイ嫁さんをGETしてしまったのである。この事実は我々取材班(若くして結婚してしまったことを多少後悔し始めている某監督、及び松岡にだけは先を越されへんやろとタカをくくっているうちに先を越されてしまった私)を戦慄させるに充分であった。

〔松岡めっちゃイケ分析その3—松岡はやっぱり強かった!〕

松岡は学生時代強かった。しかし当時彼の強さは多分に彼の持つ風貌からくるものがほとんどであり、彼が実際に強いかどうかを見た者はあまりいなかったのではないだろうか。しかし、やっぱり彼は強かったのである。何と彼は今や「空手師」なのである。しかもあの(多分)有名な正道会館に通い、ぶ厚い板を「ウリヤー」って感じて軽く割ってしまうのである。やはり今後も彼には逆らえない。

このように、めっちゃイケ青年に変貌をとげた松岡ではあるが、依然として君に与えられた特命「翔友会委員をひとつたのむ」というミッションは不変である。引き続き頑張ってもらいたい。さらにもう1つ、君に特命を与えよう。「幸福な家庭を築くこと。」

新婦のお名前 智子さん

深井君の門出

平成元年卒 浮田 勝成



まず、最初に結婚式について書く様に依頼されたが、実際は、結婚式に名を借りた飲み会であったと感じたので、依頼内容にこだわらず、進めていくことを御了解いただきたい。

さて、式の様子は、阪急百貨店の持つブランドイメージとは、掛け離れたもので(それでもやや抑え目であったと思われる。)あった。しかし、別の面から見ると、新郎の所属する美術部に人材の偏りがある様であるが、人材が豊富であることは充分理解できた。つまり、生活の安定は確保された訳だ。

次に、最近の彼は、昔の^{さんえつち}3H(ハゲでエッチではだしになると足が臭い)から進化を遂げ、5Hになったという。内容は、本人の名誉の為に伏せておくが、一般的に良い方向に変わったことは、御想像いただけると思う。又、業務としては美術部で新興宗教よろしく壺を売っているらしいが、売り手はともかく品物は、正真正銘、本物である様だ、こんな彼に嫁いだ新婦はよほど肝の座った人物であることは、間違いのないことだろう。新婦は、細かいところによく気の付く才媛であり、新郎と対照的で、美女と野獣……月とスッポン、ピンとキリ……喩えればキリがないが。

以上、今回の結婚式の特異な点ばかり述べたが、式場、料理、御両家親族及び新婦側来賓の方々は間違いなく厳かな結婚式にふさわしいものであったことは、断言しておく。

この式は、出席者としてはとても楽しかった。

最後に、私としては、この2人に幸、多かれと願うのみである。